

夏の夜の冒険

平林初之輔

青空文庫

これは一九三〇年型の実話ではなくて、ごく古風な実話である。

今から十年ほど前私は内幸町うちさいわいちょうのある会社につとめていた。

その会社には、共産党の市川正一君、文芸戦線の青野季吉君、

大竹博吉君のロシア問題研究所の仕事をしている時とき国理一君、

外務省の板倉君、日日新聞の永戸君ながとなども一しよにはたらいいて

たのだ。

その当時、時国は中里にすんでいた。私は田端にすんでいた。

そして二人とも夜勤の番だったので、夕方の五時に出社して、夜中の十一時に社をひきあげることになっていた。二人とも、出社の時刻はおくれても、退社の時刻は一分間だっておまけをしない

なまけ者だった。

夏のことであった。

内幸町の会社を十一時かつきりに出たのだから、駒込橋で降りた時は十一時半から十二時までの間であつたことは間違いない。

駒込橋を渡つた右側に小さいカフェがあつた。名前は忘れた——いまでもあるかどうかは知らない。時国の話によると主人は絵かきだということ、下にも二階にも、壁へき間に怪しげな油絵の額が沢山かかつていた。

二人は時々そこへ寄つてビールを飲んだ。

その晩もそこへ寄つた。誰の内閣だったか忘れたが、少なくとも浜口内閣でなかつたことはたしかで、十二時限り営業まかりなら

ぬというようなお達しは、その頃は出ていなかったから、十二時頃でも喜んで私たちを迎えたのであった。

二人で麦酒^{ビール}の三四本ものんでコールビーフの一皿も食べたことと思う。とにかく一時間ほどそこで時間をすごして外へ出たのであった。

上野行も新宿行ももう終電車が通りすぎてしまつて、駅員は帰り支度をしていた。

時国と私とは、橋の上に立つて、冷え冷えする夜風で涼をとつていた。

すると駅の建物のうしろのつつじや熊笹のしげっている中で、何かがさがさ動いている。

——何かあそこに動いているじゃないか？

——何だろう？

二人はその方を注視した。

——何だか人間のようじゃないか？

——子供のようにだね。

私たちは改札口の方へ降りていった。

——何ですか？

一人の駅員がとがめるように言った。

——あそこに子供がいるんですよ。ほらあのつつじの根本が

さがさ動いているでしょう。

——なる程。

駅員もバスケットを下げたまま引きかえした。

その駅員と私たち二人とで土手へ上がっていった。

汚い手拭地てぬぐいじの浴衣ゆかたを着た九つか十位の男の児が、剥製はくせいの蛙

みたいにひよろひよろになって、つつじの株の葉陰にうずくまっていた。

子供はなかなか口をきかなんだ。

別に人見知りをするわけではないが、ひどく疲れていて口をきくのも大儀だったらしい。

でも私たちは根気よく問いただして、この子供の家うちが西ヶ原にあるということだけをききとることができた。

橋の手前に交番があつたので、私たちは、ほかにどうしようもないので、その子供を交番へつれていった。きまつた仕事をもっている駅員はこういう悠長な仕事にいつまでもかかわりあつてゐるわけにはいかなないので、いつのまにか帰つてしまった。

——この子供が、その草叢くさむらの中にいたんです。家へ届けてやつてほしいんですが？

——どこにいたんですか？

巡査はうるさそうに額をしかめながら問いかえした。無理もないことだ。

——あそこの土手のつつじの根元にいたんですよ。家がわからないんじゃないかと思うんです。

——あちらなら、滝野川署の管轄になっているんで。

巡査は、たった橋一つのちがいで、この厄介者をしよいこむのを拒絶する口実を見つけたらしい。

——どこの管轄知りませんが、とにかく、この辺には、交番はここだけしかないんですから、何とか保護してやったらどうです。

——そういうわけにはいきませんね。むこうには、ちゃんと所轄署があるんだから、面倒な問題になりますからね。

——ではこの子が一人ぼっちで、夜中にこんなところをうろろしてても、君は所轄署がちがうからって傍観してるんですね？

——つい橋の向こうで人殺しがあっても所轄外なら知らん顔し

ているんだね？

私たちがむきになって食ってかかったので巡査は、少なからずむつとしたと見えて、もう我々には相手にならぬ決心をしたらしい。明らかに敵意をもって横を向いてだまってしまった。

私たちも反射的に腹がたつたので、子供をつれて、憤然として交番の前を立ち去った。

そして、別に行くところもないので、また最前のカフェへ引きかえした。というのは、最後の客を送り出して、食堂の掃除をすました女給たちが、まだエプロンをつけたまま家の前へ出て涼んでいたからだ。

——お腹すいてるんだろ？

——うん。

——おい、何か食べるものがあつたらこの子供に食べさしてやってくれ。

子供はだんだんなれてきて、女給が出してくれた椅子にくたくたとくずおれるように腰をかけた。

そして、バターをつけたパンをうまそうにむしやむしや非常な速度で食べ出した。そのうちにライスカレーもできてきた。

食事をとると、子供は見る見る元気になって、こちらの問うことには、非常に明^{めい}晰^{せき}に何でも答えた。

——君は名前は何ていうの？

—— しげるっていうの。

—— いくつだい？

—— 九つ。

—— 何年生？

—— 三年生。

—— 苗字は何ていうの？

—— かりたに刈谷 谷 っ て んの。

ここまではすらすらと答えたが、それからあとは、少しずつ口ごもるようになった。

—— お父さんはあるの？

—— うん。

— お母さんも？

— うん。

— お父さんの名前は何ていうの？

— 刈谷長太郎っていうの。

— 何をしてるの？

— 会社へつとめてるの。

— しげるちゃんどうしてあんなところにいたんだい？

— ……

— 家へ帰る道がわからないのかい？

— ……

— これからおじさんたちが送ってあげるからね、一緒に帰ろ

うよ。道はわかつてるんだろ。

——道はわかつてるけれど、僕かえるのいやなんだ。

この答えは、四方からのぞきこんで質問をあびせかけていた、みんなのものをあつけにとらせた。

——どうしていやなの、自分の家へかえるのが？

——叱られるんだもの。ぶたれるんだもの。

——誰に？ どうして？ 何か悪いことをしたの？

——なんにもしないんだけど、僕が家へかえると母ちゃんうちが怒ってぶつんだ。

子供は泣きだしそうな表情をしていたが、それでも、九つぐらいの子供にしては、言葉は実に明めい晰せきだったし、少しませすぎで

はいたが、少なくとも頭のよい子供であることは明らかだった。

——しげるちゃんはいつから御飯を食べないの？

——昨日の朝からなんにも食べないの。

——お母さんが食べさしてくれないんだね？

——………うん。

女給の一人はもうハンカチを出して眼をふいていた。

事情はもう明白だった。しげるの母親は継母ままははなのだ。それに

しても、こんな深夜に、九つぐらいの子供がどつかへ行方不明になつているとすれば、家では大騒ぎをしているに相違ない。

——これからおじさんたちが送って行って、母ちゃんによくあやまってあげるからね、一緒に帰ろうよ。

ライスカレーを一皿平らげてしまつて、きよとんとして宙を見つめていた彼は、しばらくしてから言つた。

——いやだ、僕、家へ帰るのはいやだ。今度帰ったら承知しないつて母ちゃんと言つたんだもの。

私たちは、子供をカフェにあずけておいて、子供にきいた道を辿つていった。

暗いのに軒灯けんとうのない家が並んでいるので、燐寸まっちをすつていちいち表札の文字をすかしすかし、探さねばならなかつた。

蚕事試験場の少し手前を右へ折れた路次でやつと目的の家をさがしあてるまでに三十分はたつぷりかかつた。

木戸を開けようとすると内側から鍵がかかつていて中々あかない。

私たちはどんどん叩いた。

——ごめん下さい………今晚は………と大きな声でどなった。

それでも家の中はしずまりかえっていて返事がない。

癪にさわるのでますますひどく木戸を叩きつづけた。
しやく

最初、何事だろうと思って近所の人起きてきた。

そのうちに、やっと、玄関にあかりがさした。そして、いかに

ものろい動作で戸があけられた。

——貴方あなたがご主人ですか？

——はあ。

主人というのはまだ三十五六位のおとなしそうな男だった。

——ずいぶん声をかけたのですが聞こえなかったんですか？

——ちようど寝入りばなだったものですか。

——ではおやすみになっていたんですか？

——はあ。

私と主人が話をしていると、いきなり後ろから時国がとなりつ
けた。

——おい、君は今きいておればねていたんだそうだが、君の子
供がいまどうなっているか知ってるのか？

——……………

——君の子供はいま死にかかってるんだぞ。

——今頃になって自分の子供が帰ってこないのに、三十ぺんも戸をたたかねば眼がさめんほど熟睡しているなんて、それでも君は親か？ 人間か？

——ずい分さがしてみたんですけれど。……

——わからなかったからねてしまったっていうのか？ 馬鹿ッ。

——……………

——この近所で君のことを何と言ってるか君は知ってるか？

鬼だと言ってるよ。君の子供は昨日きのうから何も食べないで、かわいそうにひよろひよろして線路の土手にねていたんだ。

——すみません。

——すみませんじゃないよ。おかしいね、君は、子供のことを

ちつともさつきからたずねないね。子供の居場所がわかったら、ちつとはうれしそうな顔をして、はやく子供の顔を見たがりそんなものののに、ちつともうれしくないのかね？ 他人ですら、みんな心配して、いろいろ世話をしてくれているんだよ。隣近所の人だって、みんな氣にしてああして起きてきているんだ。それなのに一体、母親はどうしたんだ？ 君の細君はどうしたんだ？

玄関の次の室^{へや}につつてある蚊帳^{かや}の端つぽが、開いた襖^{ふすま}から見えた。その中で突然わつと女の泣き声が爆発した。

急に劇的な場面が現出した。細君がくしゃくしゃの浴衣^{ゆかた}のままで玄関へ飛びだしてきた。

——わたしが悪うございました……

彼女は泣きながら何か口の中で弁解をはじめた。話できいた時には、殺してもあきたりない奴だと思つたが、實際あつてみると、それ程となりつけるわけにもゆかない。まして相手は若い、おまけに美しい女なのだ。若い女の涙という奴はどうも男には苦手だ。私たちはそれ以上追及することはやめた。そして、何だかひどく意義のあることをしたような、拾い物をしたような気持ちになつてその家をひきあげたのであつた。

——駒込橋のとこのカフェにいるから、すぐにむかえにいつてやりなさい。

帰りがけに私たちは、玄関にうなだれている二人の夫婦に向かつていい気持ちでこう言つてやつた。

もう三時過ぎていたのに、近所のかみさんたちがぞろぞろ起きてきて、いつのまにか、門口かどぐちに黒山を築いていた。

——ほんとにひどい女ですよ。

——あれくらいなことでおなるもんですか、今にあの子はもつとひどい目にありますよ。

——毎日旦那がつとめに出るとすぐにひいひい泣かせてるんですからね、近所のものがはらはらしますよ。

——芸者あがりですなきつと。

——芸者ならもう少し気がきいてますよ、板橋あたりの女じよろう郎か、玉の井ですよ。お里は。

——旦那が意気地がないんだ。あんなまねをさせておくなんて。私たちはこんな憎々しげな罵声の中をわけて、かみさんたちに顔を見られながら出ていった。

——痛快だったね。

——うん、でも、あんなことをして、かえってあの子があとでひどい目にあいやしないかしら、いま内儀^{かみ}さんたちもそう言うてたよ。

私は少し憂鬱になつてきた。

——そんなことしたら承知しないさ。僕はまたちよいちよい見にいつてやるつもりだ。

——そうだ、そうしないといけない。このままじゃかえって悪

い結果になるかもしれないからね。

だがむろん私たちはそれきり行ってみなかつた。翌くる日の晩、例のカフェへ行つてたずねてみると、

——ひどい人ですね、今日の夕方になつて、やっと父親の方が迎えにきたんですよ。お礼一つ言わないで、怒るようにしてつれてゆきましたよ。子供もちつともなつかないで、帰るのはどうしてもいやだつてのを、ぶつたり叱つたりしてひきずるようになしていきましたよ。いいえ、お金なんて一銭だつておいてゆくもんですか……

こんな話を女給の口から聞いても、もう前日のような興奮をとりもどすことはできなかつた。世の中には色々な人間があるもん

だ——こう思つて、軽く吐息をつくくらいがせいぜいだった。

それから六七年たつてからだ。

私はしばらくぶりである会社へつとめたことがある。すると、そのの庶務に、どうもどつかで見たことのあるような人の顔を見出だした。それでどうしても思い出せなかったが、ふとした機会でその名前が刈^{かり}谷^{たに}長太郎ということを知ったときに、六七年前の記憶が一度に甦^{よみがえ}つてきた。

やつと、その男に近づく機会を得た時に私は早速たずねてみた。

——あなたお子さんはありますか？

——いいえ今はありません。

——前にはおありになったのですか？

——え、いい子でしたが、九つの時に死んじまいましたよ。生きていたといま十六ですがね。

——それはお気の毒ですね、何かご病気でも？

——怪我をしましてね、火傷やけどをしちまつたんですよ。

——あぶないですね、こたつでも？

——いいえ、夏でしたから、炬燵こたつじゃないんです。瓦斯ガスなんで

す。身体からだじゆう火ぶくれになってかわいそうな死にかたをしました。
た。

男の眼は涙ぐんで、一言ひとこと々々に昔を思い出す様子だった。

——奥さんとお二人じゃさびしいでしょうね。

——家内はありません。

——ではやつぱりご病気でも……

——いいえ、死んだんじやありません。はじめの家内は子供が四つの時にチブスで死んだんですが、二度目ののは、子供がなくなつた年に出てゆきました。まだ初七日もたたないうちに出ていったんです。おはずかしい話ですが。

こう言いながら彼は私の顔をじろりと見たように思った。私もどきりとした。

子供の不思議な焼死——瓦斯の火で身体じゆうが火ぶくれになるようなことがあるはずはないのだ——それからすぐに母親の家出、しかも、それはまがいもなくあの年の夏だ。ことによるとあ

の次の晩のことかもしれぬ。私は、九つの子供が、母親に瓦斯で焼かれている光景、憎悪に燃える若い母親の顔を想像してぞつとした。

——あの二人のおせっかい者さえ出てこなければ、こんなことにはならなかったに……と言っているように見える話し手の顔はさらに気味が悪かった。彼は私の顔をよく憶えているのじやあるまいか？ あの時帽子をきたままだったからまさかおぼえてはいまい。

私は舌が硬ばってその先をきく勇氣はなかった。

青空文庫情報

底本：「平林初之輔探偵小説選2」[#「2」はローマ数字、1-13-2
2]「論創ミステリ叢書2」論創社

2003（平成15）年11月10日初版第1刷発行

初出：「文学時代 第二巻第九号」新潮社

1930（昭和5）年9月号

入力：川山隆

校正：門田裕志

2011年1月4日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.w.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

夏の夜の冒険

平林初之輔

2020年 7月13日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>